

©2020 年 5 月

◎第 1940 回 定期公演 C プログラム

■ガーシュウィン

■ピアノ協奏曲 ヘ調 (約 31 分)

ドイツ出身の指揮者ウォルター・ダムロッシュ (1862～1950) は、父親のレオポルドからニューヨーク交響楽協会 (のちのニューヨーク交響楽団) の音楽監督を引き継ぎ、ワーグナー作品などを積極的に指揮していた。彼がガーシュウィンに惹 (ひ) かれるようになったのは、すでに《ラプソディー・イン・ブルー》が世に出た後の 1925 年である。あくまでブロードウェイの作曲家であったガーシュウィンの作品に、「旋律の着想力と和声進行の両面で独創性を感じた」というダムロッシュは、より本格的な芸術作品でも成功できると見込み、ガーシュウィンにニューヨーク交響楽団のためのピアノ協奏曲を委嘱することを決意する。同楽団で、ガーシュウィンのピアノ独奏により初演することも条件だった。これがガーシュウィンにとって、自身がオーケストレーションを手がけた初の本格的な協奏曲となる (《ラプソディー・イン・ブルー》はファーディ・グローフェが管弦楽編曲を行った)。ガーシュウィンは改めて古典楽式を学習し、グローヴ劇場を借り切って管弦楽部分を試演してもらうなど、最大限の準備をした。その効果もあり、グラズノフの《交響曲第 5 番》やアンリ・ラボーの《イギリス組曲》などと並べて演奏されたこの新作は、熱烈な喝さいを浴びた。ガーシュウィンはクラシック系列に連なる作曲家としても真に認められることとなったのである。

協奏曲に典型的な急緩急の 3 楽章形式をとるが、その内容は、生き生きとした主題とアドリブ的なリズムの掛け合いに満ちた、ショー・ピアニストならではの感性によって彩られている。第 1 楽章 (アレグロ、4/4 拍子) 導入部の後にピアノ独奏がシンコペーションの特徴的な主題を奏で、空気を一変させる。いわゆる展開部では導入部のリズムと主題のリズムが発展していく。イングリッシュ・ホルンと弦楽が主旋律を担当するロマンチックな場面から、ピアノが主役の躍動的な場面へと移り、全合奏で主題が回帰したところでクライマックスとなる。第 2 楽章 (アダージョ・アンダンテ・コン・モート、4/4 拍子) トランペットをはじめ、個々の管楽器にスポットが当たるジャズ色の強い緩徐楽章である。イングリッシュ・ホルンの旋律断片を受けて参入するピアノの登場部分も魅力的である。

中間にピアノのカデンツァが挟まれる。第3楽章（アレグロ・アジタート、2/4拍子）快速の快感を体現した軽快なフィナーレの終盤に、突如第1楽章の主題が出現する。

作曲年代：1925年

初演：1925年12月3日、ニューヨーク、カーネギー・ホール、ウォルター・ダムロッシュ指揮、作曲者のピアノ独奏、ニューヨーク交響楽団

（安川智子）